（第２号様式）

神奈川県教育委員会教育長　殿

令和４年４月６日

県立住吉高等学校長

令和３年度　学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	４年間の目標（令和２年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価（３月 16 日実施）	総合評価（３月 31 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	①生徒の進路選択に適合する教育課程を編成し、組織的な授業改善に取り組む。	①令和４年度からの新しい教育課程が実施できるよう準備するとともに、組織的な授業改善に取り組む。	①新しい教育課程の実施に向け、選択科目設定のための準備を行う。	①新しい教育課程の実施に向けた選択科目設定の準備ができたか。	①令和４年度の教育課程実施に向け、選択科目の設置や年間授業時数の確保、時間割作成の準備をすすめることができた。また、評価方法の変更に伴う検討も行った。	①新年度の時間割作成や評価方法の変更に伴う成績処理システムの準備、教室利用計画等、新教育課程実施に向け、課題を整理しながら作業をすすめていく。	①新しい学習指導要領の実施に向けて様々な工夫をしているようであるが、教員の働き方改革についても検討してほしい。	①令和４年度の授業を実施する準備はできたので、令和５年度以降の検討を進めていく必要がある。また、さらに探究的な学習を発展させて、生徒の進路希望を実現できるよう授業改善を図っていきたい。	①令和４年度の新入生から一人一台端末が導入されるので、授業における効果的な活用方法を検討し、探究的な学習活動を増やしていく。
		②情報活用能力、論理的思考力や他者と協働した問題解決能力を身につけさせる授業を実践する。	②すべての教科において、プログラミング教育を推進する。	②すべての教科において ICT 機器の利活用を推進するとともに、論理的思考力を育成する。	②ICT 機器を積極的に利活用できたか。 ②論理的思考力や他者との協働による問題解決能力を育成できたか。	②入学早々より機器の登録や ID の配付をし、GoogleClassroom や Meet を活用し、分散登校時のオンライン授業に対応することができた。	②入学の早い段階から生徒が使用できる環境を整えるため、クラス編成完了とともに作業を開始する。	②オンライン授業の実施やスマートフォンを活用した調べ学習など、ICT 機器を活用して生徒の学びを広げている様子が見られる。	②生徒及び教員ともに授業で ICT 機器を活用することに抵抗感がなくなってきている。しかしながら教員間のスキルの差が大きいので、ボトルアップを図っていく必要がある。	②一人一台端末が導入されるので、探究的な学びにつなげられるよう授業改善を図っていく。
						②総合的な探究の時間で各学級が足並みを揃え、各教科との連携もあり、生徒がプログラミング的思考力を養う活動ができた。	②担当者の負担を分散できるよう、グループや学年で協力して取り組む必要がある。	②プログラミング的思考力は社会へ出てから必要となる力なので、きちんと身に付けさせてほしい。	②ペアやグループで学習するなど生徒が主体となって活動する場面が増えてきたが、論理的思考力や他者との協働による問題解決能力の育成は、まだ十分にできていない。	②校内外の様々な取組を紹介して、それぞれの授業に適した方法を模索していく。
2	（幼児・児童・） 生徒指導・支援	①生徒一人ひとりの個に応じた支援体制の充実を図る。	①生徒一人ひとりの状況を把握し、必要な支援を行う。	①面談等を通して把握した生徒情報を、担任、学年団、教育相談コーディネーター、養護教諭、スクールカウンセラーと共有し、外部機関と連携しながら対応する。	①生徒情報を学年会やグループ会議等で共有し、必要に応じて外部機関と連携したか。	①コロナ禍において生徒の生活環境が大きく変化している状況である。職員間で支援が必要な生徒の情報を共有することにより、個々のケースに応じた支援計画に基づいて支援することができた。SC や SSW、養護教諭、教育相談コーディネーターの連携が効果的である。	①職員一人ひとりが、生徒の小さな変化を見逃さないように注意深く観察することで、支援の必要な生徒に気づいて支援へつなげていく。支援の必要な生徒を把握できた場合は適切に対応することができているが、他にも支援の必要な生徒がいると考えられる。	①コロナ禍で生活環境が大きく変化したが、学校は臨機応変に対応できていた。支援を必要としている生徒の対象が変化していると思われるし、それが見えにくくなってきているようでもある。そのような状況でも SC や SSW と連携・協働することで課題を解決しようという姿勢が感じられた。	①課題を抱える生徒が増加しているが、職員間で情報を共有したり SC や SSW と連携することで、概ね適切に対応することができた。しかし、表面化しない案件もあると思われるので、さらに注意深く気を配る必要がある。	①HR、授業、部活動などあらゆる場面で生徒の様子に気を配り、少しの変化でも情報を共有して早期発見につなげていく。
		②生徒の自己肯定感及び自己有用感を育成し、コミュニケーション能力を身につけられる指導を実践する。	②生徒が様々な人と関わることで、社会性を身につけ、自己肯定感や自己有用感が向上するよう支援する。	②部活動、生徒会活動におけるボランティア活動に加え、一般生徒のボランティア活動への意識向上を図り、ボランティア活動参加の機会、参加生徒数を増やす。	②地域との連携活動やボランティア活動への参加生徒数が増加したか。	②コロナ禍のため地域との連携は難しい状況であった。令和４年度も状況はあまり変わらないと予想されるので、状況に応じて工夫し取り組む必要がある。	②近隣の商店街などは好意的に対応してくれるので、生徒が主体的に活動する姿勢を育成していきたい。今後の新型コロナウィルスの感染状況と社会情勢により対応したい。	②コロナ禍でコミュニケーションが希薄となってしまった時期があり、今後が心配である。地域の商店街や中学校でも積極的に連携していきたいと考えているので、工夫が求められる。	②新たに連携できた施設も現れたが、地域との連携活動やボランティアへの参加生徒数は、コロナ禍で増やすことは困難であった。安心して地域に出ていける仕組みを考えていく必要がある。	②感染状況を見極めつつ、できることを少しでも増やしていく工夫する。

	視点	４年間の目標 （令和２年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 （３月 16 日実施）	総合評価（３月 31 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
３	進路指導・支援	より質の高い進路目標を生徒が自ら設定し、自主的に準備に取り組めるよう進路指導の充実を図る。	生徒が主体的に自らの進路選択をし、それを実現できるような指導・支援を充実させる。	○生徒が主体的に進路選択できるよう、新たな入試制度を有効に活用し、適切な情報提供と個別指導・ガイダンス等を行う。	○「魅力と特色ある県立高校づくりについてのアンケート」において、キャリア教育の成果に係る質問に対する回答の満足度が 80％を超えているか。	○「進路通信」を通して、新たな入試制度や専門学校の選択、インターンシップなどについて情報発信を行った。特に３年生については、面談を丁寧に行い、進路指導の柱とした。	○文化祭の時期と共通テストの申し込み、推薦願の申し込みの時期が重なるため、事故を招きやすい。 入試の多様化における情報の把握が難しい。	○「進路説明会」などを通じて、生徒たちに将来の興味を引き出してもらえているようである。生徒たちには、一つ上の目標を持たせてほしいと思う。進路に限らず、オンラインで面談ができる環境を今後も残しておくことが望ましい。	○一般入試で国公立大学や難関私立大学を目指す生徒が少しずつ増加してきた。生徒がより高い目標をもって達成できるように支援する体制づくりが必要である。	○入学後に早い時期から学習習慣を身に付けさせ、部活動と両立できるよう指導していく。
４	地域等との協働	地域との協働を推進し、地域に信頼される学校づくりを進める。	本校への理解を深めてもらうために、本校の教育活動を積極的に広報するとともに、地域に開かれた学校として地域との信頼関係を築く。	○学校説明会や学校見学が安全で、満足感のあるものにするため、内容（特に新しい教育課程について）や環境整備等を充実させる。	○学校や地域の課題を共有し適切な解決策を見いだすことができたか。	○学校見学、学校説明会は予約制とし、人数をしぼらざるを得なかったため、学校ＨＰに説明会用資料、音声による説明をアップするなどの対策を行った。	○次年度以降も、安全性と満足度を両立させるために、工夫を重ねる必要がある。	○中学生向けの情報発信を、ICT 機器を活用するなど工夫して行い、中学校としてはとてもありがたいと感じている。	○ICT 機器を活用して学校見学等の予約や動画等の配信を通じて、コロナ禍でも安心安全に学校の状況を伝えることができた。地域の方々は情報を早めに手に入れたいが、後手に回ってしまったことがあった。	○早めに計画を公表して参加希望者が予定を立てやすいようにしていく。
				○学校運営協議会や PTA 活動を通して、保護者・地域の意向を把握し教育活動に反映させる。	○学校や地域の課題を共有し適切な解決策を見いだすことができたか。	○コロナ禍のため PTA 活動も縮小を余儀なくされているが、こういう状況下での活動が一定の定着をし、学校の活性化につながっている。	○コロナ渦において保護者・地域の課題共有がなかなかできていない状況であるが、今後も引き続き取り組んでいく。	○今年度も「お掃除大作戦」などのイベントができなかったが、復活できることを期待している。地域としても行事の PR などで協力できるので、様々な分野で協力していきたい。	○コロナ禍の中でも少しずつではあるが、地域との交流の機会を増やすことができた。さらに工夫をして地域との交流を増やしていきたい。	○地域の商店街や中学校などと協力して、連携の機会を増やしていく。
５	学校管理 学校運営	すべての職員が教育環境の変化に迅速に対応し、前向きに課題に取り組む学校文化を形成する。	高校教育を取り巻く様々な課題に協働して対処していく体制をつくる。	○協働して課題を解決するために必要な情報を得たり、研修等を実施したりする。	○課題解決のために有効な情報提供と研修ができたか。	○授業改善のための研修（プログラミング教育）月１回の割合で４回実施し、各教科での活用ができつつある状況である。教育的な課題や防災、事故防止に係る研修を定期的に行い、事故防止等についての意識を高めた。	○引き続き効果的な研修を模索し、継続することにより、高い意識を持ちながら生徒と向き合っていきたい。	○コロナ禍への対応、大学入試制度の改定、令和４年度からの新課程への対応などたくさんの課題に取り組んでいて大いに評価できる。授業改善については中高で連携しながら切磋琢磨できることもあると思うので、今後もお願いしたい。	○プログラミング教育については計画的に職員への研修を実施し、意識改革を図ることができた。生徒の行動にもその効果が少しずつ現れるようになってきた。今後も引き続き意識の向上に努めていきたい。	○まだまだ様々な課題があるので、目的を明確にして計画的に調査や研修を行っていく。